



一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

**一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
2012年度事業報告書&決算書
(2012年6月1日~2013年5月31日)**



連絡先： 一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目45番1-302号
電話06-6622-5645/ ファックス06-6621-7139
E-mail : community_4_children@yahoo.co.jp

はじめに

コミュニティ・4・チルドレン（C4C）は、皆様のご支援を受け、2011年6月6日に一般社団法人となつてから2年が経過しました。

2012年度は、2011年度に引き続き、タイ、フィリピンの現地団体への支援を継続しました。タイでは、子どもたちに対する直接支援だけでなく、コミュニティや保護者会などとの協働の機会が増えました。またフィリピンでも、新たに青年層のしょうがい者を対象とした自立生活支援プログラムの試行が始まりました。

そして2012年度から新たに東日本大震災の被災地である宮城県でも、地域一体で取り組む防災・福祉学習推進事業を始めました。スタディツアー、I Do Café、フィリピンでのインターンシップ・プログラム、海外プロジェクト助成と、取り組み内容も幅が広がってきました。

2013年度は、タイ、フィリピン、日本それぞれの取り組みが持続し、成果が高まるように継続的に支援して行きます。また、国内外に広く目を向け、新たな支援先の開拓にも力を注いで行きます。

日頃、支援いただいている会員、寄付者、協力者の皆さんにとってC4Cがより価値のある信頼できる団体となるよう努めてまいります。

1. NGO 支援事業

1-1. 海外支援事業

2012年度は、タイ国カムクーンカムペン財団とフィリピン国 JPCOM-CARES と連携し、運営・活動を支援しました。

A. カムクーンカムペン財団（タイ国コンケン県）支援事業

①奨学金：出稼ぎ、死別、離婚などの理由によって両親と日常的に暮らしておらず、かつ経済的に苦しい家庭の中・高校生（専門学校を含む）、一学年につき5名、総勢30名に対して、年額6500バーツ（約1万8千円）を支援しています。しかし昨年度高校3年生だった世代は、中退したり、両親の引っ越しなどにより、奨学金の受け取りを途中でやめてしまったため、その分の奨学金は年少の世代の子どもに振り分けました。そのため、今年、高校を卒業した奨学生はいませんでした。

②地元文化の継承：地元のコンケン大学芸術学部の学生に、月3～4回伝統舞踊と伝統楽器の演奏を教してもらっています。毎回、25～27名の子どもたちが、男子は楽器演奏、女性は踊りを学びます。それまで自己表現が苦手だった子どもたちも、伝統音楽や舞踊を通じて自信を持つようになり、様々な場面において人前で自分の意見を言えるように成長しています。また年長者（中学生）が年少者（小学生）に教えることで、より一層責任感を持つようになり、グループとしての一体感が生まれるようになりました。そして、行政やNGOが主催するステージで、楽器演奏と踊りを披露しています。人前で演奏することによって、より一層自分に自信を持ち、練習する励みにもなります。

また中学を卒業した奨学生4名が、伝統芸術専門学校に進学し、伝統音楽の専門課程に学ぶことになりました。伝統芸術系の専門校に行くことは、経済的にも成績の上でも、大学に行くことが難しい子どもたちにとって、自分の能力を伸ばし、就活への自信につながります。



子どもたちが演奏・踊りを披露した場、日時

日	主催	場所	参加した子ども の人数(名)
2012年7月16日	コンケン大学ライブアートハウス Ban Chiwasin*	コンケン大学	24
9月19日	青少年のためのアートプロジェクト	コンケン市ユース・センター	23

10月6日	「鳥を愛するネットワーク」主催森林保護活動のための資金集めコンサート**	チャイヤプーム県ゲーンクロー郡タマファイワーン村	19
11月16-17日	厚生省事業「幸福のための音楽プロジェクト」	ウドン県バーンドゥン郡カシカムタマチャート・センター	23
12月8-10日	厚生省事業「幸福のための音楽プロジェクト」	ラヨーン県カレーン郡トゥンクワーイキン行政区ネンカオディン寺院	25名
12月12-16日	アパイベート病院主催自然と薬草資源の保護のための青少年キャンプ	カオヤイ国立公園	23 全体参加者 380
12月28日	コンケン市主催青少年のための年末行事	コンケン市青少年センター	23
2013年1月18-20日	「インペーン・ネットワーク（農民ネットワーク）25周年記念」行事	サコンナコン県クットパーク郡クットパーク行政区ブア村インペーン・センター	22
3月15-17日	全国自然農法ネットワーク主催「世界の食糧危機は、人類を滅亡させる」事業	チョンブリ県バーンブン郡自然農法センター	24

*ライブアートハウス：コンケン大学病院に入院する子どもたちのために活動を行う団体

**カムクーン財団もネットワークの一員となっている「鳥を愛するネットワーク」は、全国の会員に支えられている森林保護団体である。多くの青少年グループも参加し、年に一度、環境保護の資金を集めるために「歩く」イベントをしている。

演奏と踊りの練習日程

練習実施月	実施日数	参加人数(平均)	練習実施月	実施日数	参加人数(平均)
2012年6月	3日間	27	2012年12月	4日間	25
2012年7月	5日間	27	2013年1月	5日間	25
2012年8月	3日間	27	2013年2月	2日間	25
2012年9月	8日間	25	2013年3月	3日間	27
2012年10月	1日間	25	2013年4月	2日間	27
2012年11月	7日間	25	2013年5月	8日間	27

③技術・知識の習得

月例読書会：一昨年末まで毎月1回カムクーン財団から奨学金支援を受けている30名の子どもたち（中学・高校・専門学校生）を対象に事務所に集まり、読んできた本の内容と感想をみんなの前で発表する読書会を行っていました。このような活動を通じて、人の前で体や言葉で表現する技術を磨くことを目的としています。しかし2012年度は、事務所が手狭になり、子どもたちが全員座ることが困難となり、近くの国立公園やダムに日帰りで行って、会を持つようになりました。少し遠くに行くため、毎月、会を開くことは難しく、昨年度に開催したのは3回だけでした。

視察・研修：他団体が主催する行事に参加し、農業や伝統技術を学びました。

2012年8月24-26日 ブア村・地域を愛する子どもキャンプ、於サコンナコン県クットパーク郡クットパーク行政区ブア村インペーン・センター。全体参加者85名（うちカムクーン財団から18名）。

12月8-10日 厚生省事業「幸福のための音楽プロジェクト」於ラヨーン県カレーン郡トゥンクワーイキン行政区ネンカオディン寺院 全体の参加者200名以上（子ども・青少年100名、コミュニティの大人100名、うちカムクーン財団からの子ども25名を含む）

2013年1月18-20日「インペーン・ネットワーク（農民ネットワーク）25周年記念」行事に参加しました。於サコンナコン県クットパーク郡ブア村インペーン・センター。参加者インペーン・ネットワークに参加する全国の農民800名、うちカムクーン財団から参加した子ども22名。

3月15-17日 全国自然農法ネットワーク「世界の食糧危機は、人類を滅亡させる」事業に参加しました。於チョンブリ県バーンブン郡自然農法センター。参加した子ども24名。

精神修行（瞑想修行）：タイでは、仏教の教えが日常生活や人生の指針になっています。瞑想修行は、平常心を養い、様々な困難に立ち向かうための精神性を培うため、幅広い世代のタイ人に人気があります。

特にコンケン県ウエルワン寺とその関連施設では、若者向けに瞑想修行コースを開催しています。寺院で戒律を守りながら集団生活をすることによって、日頃体験できない規律を学びます。また僧侶も若者向けに道徳や親の恩などを教えます。子どもたちは、道徳知識や内観法を学ぶことによって、自分自身を見つめ、何事にも冷静に対処できるようになることが期待されます。1週間以上のコースに参加した子どもたちは、少し大人になって帰ってきました。

2012年10月14-28日子ども23名、2013年4月18-23日22名参加。

④コミュニティ植林：コミュニティにおける植林事業（森を愛する子どもプロジェクト Dek Hak Khok）

2011年度より、子どもたちが住む地域で、子どもたちが中心となっていく公共林の復興・環境保全活動を始めました。（2011年11月～2012年10月まで、「タイ国コンケン県コミュニティ森林再生のための青少年育成プロジェクト」として公益財団法人庭野平和財団から助成を受けて実施しました）

植林 「森を愛する子どもたちの植林活動」KK財団のスタッフと子どもたちが地域の住民たちと一緒に、昨年植林した約1600㎡のノンメック村の公共地に、さらに植林をしました。昨年、植林した一部の



の苗木は干ばつのため枯れてしまったため、多様な苗木を補充し、雑草の除去を、2012年8月18日にKK財団活動地域（4ヶ村）の村人、村のリーダー、子どもたち約130名が一緒に行いました。

自然学習 地域の子もたちが自分たちのコミュニティ森林の中に入り、森に詳しい村の長老たちから様々な森の産物について学びます。



2012年8月2日、子ども21名が、村人3名の指導のもと、ノンメック村のコミュニティ森林の資源調査を行いました。森の中にある食用植物、薬草、動物、虫などの種類を調べました。意外に動植物が豊富にあることがわかり、子どもたちは元気いっぱい楽しみました。子どもたちが森の重要性を学べる、このようなプログラムは継続して行っています。

9月9日参加者子ども21名が村人3名の指導のもと、ノンメック村のコミュニティ森林のキノコを採りました。干ばつのためかキノコの数は一昨年と比べて減少していましたが、採ったキノコの料理の仕方も村人から学びました。その後、学校の授業でもその結果を発表しました。

⑤保護者とのネットワークづくり：カムクーン財団が行う子どもに対する様々な活動を保護者に理解してもらい、同じ年頃の子もを持つ親同士の経験を語りあい、問題の解決策を一緒に話し合い、子どもとの関係をよくするために、2012年度から保護者会議と親子キャンプを始めました。これまで同居していてもお互いに忙しいため、親子の会話がなかったところ、改めて親子で話し合う機会が持てたと、親子ともにキャンプへの参加をとっても喜んでいました。保護者同士も子育ての悩みを共有する機会を得ることもできました。そのため保護者会議を定期的に開く案が保護者側から出て、持ち回りで保護者だけで子育てや家族の問題を話し合う場としての保護者会議を始めることになりました。そして会議名を「子どもを愛する人のネットワーク」と呼び、保護者である親、祖父母、親戚、近所の人を含めた、緩やかなネットワークを作ることで合意しました。子どもの支援は、家族やコミュニティとの協働作業です。今後も保護者会の発展をサポートしていきます。



実施日	活動	場所	参加者人数子ども/大人
2012年6月2-3日	家族キャンプ	チャイヤプーム県プリーマリゾート	25/17
8月11-13日	家族キャンプ	コンケン県カオスワンクワン郡ルックチャート・カオスワンクワン公園	30/13 大学生ボランティア2、教師1
9月23日	保護者会会議	コンケン県ノーンタカイ村保護者の家	0/20 教師1
10月21日	保護者会会議	カムクーン財団事務所	3/17 教師1
10月31日	ネイチャー・ゲーム兼親子キャンプ	コンケン県カオスワンクワン郡ルックチャート・カオスワンクワン公園	30/20
2013年1月6日	保護者会会議	ノーンタカイ・ノーンメック村小・中学校	25/27 教師1、卒業生5

<今後の課題>これまで子どもたちの音楽の練習場所としてカムクーン財団のオフィスを利用してきました。しかし練習回数が多く、大きな音を出して練習するために、近所の人々から苦情が寄せられるようになりました。伝統音楽の練習に参加したい子どもたちは多いのですが、思いっきり音を出せる場所を見つけることができません。将来的に村落の中で子どもたちが集まれる場所を作りたいのですが、やはり音の問題があり、解決策が見つけ出せないでいます。また新たに始めた保護者会の活動は、将来、子どもたちを見守り支援する母体となることが期待されます。今後、保護者達の活動を支援する機会を増やしていきたいと考えています。

B. JPCoM-CARES (フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町) 支援事業

JPCoM-CARES (ジェイピーコム ケアーズ) は、子どもや青年層のしょうがい児・者たちが、健康で、学ぶ機会があり、社会的にも精神的にも自立し尊厳のある暮らしを営める社会づくりを目指して、2008年1月に発足しました。

必要なサービスの提供がなく、社会資源の乏しい山岳部地帯バギオ市とカバヤン町の2カ所を拠点に、2012年度は、以下のような活動を行いました。

①リハビリテーションセンターでの「理学療法」、「作業療法」、「教育支援」

バギオ市には「STAC5 (Stimulation & Therapeutic Activity Center : スタックファイブ)」(以下STAC5)、カバヤン町には「Ajuwan Therapeutic Center」(以下ATC)と呼んでいるリハビリテーションセンターを設置し、一人ひとりに必要な「理学療法」、「作業療法」と「教育支援」を行っています。

今年度の利用者数(人) :

	継続	新規	計
バギオ市/STAC5	148	72	220
カバヤン町/ATC	111	13	124
計	259	85	344

サービス数(回) :

カバヤン町での「理学療法」と「作業療法」は、バギオ市のスタッフが通い、毎週火曜日に実施しています。

	理学療法(前年)	作業療法(前年)	教育支援(前年)	計
バギオ市/STAC5	1,890 (1,923)	2,736 (2,172)	1,326 (1,589)	5,952
カバヤン町/ATC	256 (238)	91 (37)	333 (332)	680
計	2,146 (2,161)	2,827 (2,209)	1,659 (1,921)	6,632

②リハビリテーション&衛生プログラム

ビタミン剤やサプリメント、医薬品の提供、ワクチンの接種

栄養失調状態にある 32 人の子どもたちがビタミン剤やサプリメント、医薬品の提供を受けました。3 ヶ月間の摂取の後、ほとんどの子どもたちの体重が増加し、健康状態の改善が見られました。今後もモニタリングを継続していきます。

7 月 27 日には、医療従事者の協力のもと、子どもたちとその家族、スタッフを合わせた 61 人が健康診断を受け、市保健局からの医薬品の支給も得ることができました。

1 月 25 日には、53 人の子どもたちと 16 人のスタッフとボランティアが、インフルエンザワクチンの接種を受けました。4 人の看護師がボランティアで協力してくださいました。

水治療法

4 月 25 日、30 人の子どもたちと 79 人の家族、15 人のスタッフとボランティア、16 人の介護実習生が参加し、温水プールでの水治療法を行いました。理学療法士が、保護者に体を柔軟にし可動域を広げる方法の指導を行いました。



③教育支援&自立生活プログラム

奨学金

経済的に就学することが難しい 35 人の子どもたちに対して、奨学金を支援しました。保護者たちは、4 ヶ月に 1 回程度集まり、成績、学習や学校生活での困難など、それぞれの近況報告を行いました。保護者間のディスカッションやスタッフのアドバイスから学ぶことや助けられることがありました。

学用品の支給

STAC5 の 24 人と ATC の 36 人の子どもたちに、ノート、クレヨン、はさみ、定規、カッター、消しゴム、鉛筆、ボールペンなどの学用品の提供を行いました。

自立生活プログラム

STAC5 と ATC を利用する子どもたちを対象に自立生活プログラムを開始しました。第 1 期生として、STAC5 の 11 人、ATC の 5 人の利用者が参加しました。

ペインティングや貼り絵、写真撮影、ダンスや歌唱などの「芸術・音楽活動」、掃除や後片付け、ゴミ捨て、裁縫や調理などの「基本的な家事」、手洗いや整髪、歯や爪、耳などの手入れなどの「身だしなみ」、古紙を使ったアクセサリー作り、古着を利用した足マットづくり、テーブルマナーなど、社会スキルや精神的な成長と向上を目指して行いました。段階に分けて行っていく中で、コミュニケーション力やスタッフが伝えていることを理解する力が少しずつ育ってきています。



④多様な機関との連携とネットワークづくり、社会資源の活用と動員

学校長や職員との協議や連携づくり

JPCoM-CARES のスタッフは、子どもが入学できるよう許可の依頼のため、保護者とともに学校を訪問しています。また、奨学金を受けている子どもたちの成績や学校の教育環境の調査を行いました。学校内で課題やトラブルのある子どもについては、保護者とともに学校を訪問し、学校やクラスメイトの配慮や関わり方について情報を共有しました。



物資援助や寄付

様々な個人や組織から、ワクチンや医薬品、センターの活動に利用できるおもちゃ、体重計、スピーカー等の寄贈がありました。

子どもたち、保護者、協力機関や支援者との集い

STAC5 が設立されて 15 年が経過しました。これまで、バギオ市だけにとどまらず、近隣の自治体や他の州の子どもたちも含めて、たくさんのしょうがいのある子どもたちにサービスを提供してきました。そこで 2012 年 10 月 24 日に催した 15 周年記念行事に、子どもたちや家族、スタッフ、ボランティアに加えて、市社会福祉事務所、消防局、前市長などの支援者や協力者などを招きました。総勢 151 人が集まり祝賀会を楽しみました。C4C 代表理事、日本の支援者も出席し、しょうがい児・者が笑顔で地域で暮らしていけるよう、団結を強めました。

年末の集いとクリスマスパーティー

12 月 8 日、72 人の子どもたち、141 人の家族、9 人のゲスト、14 人のスタッフが STAC5 に集いました。12 月 15 日、42 人の子どもたち、78 人の家族、4 人のゲスト、6 人のスタッフとボランティアが ATC に集いました。

ロータリークラブ、ハンバーガーショップのジョリビーなど、様々な支援者も出席してくださいました。子どもたちによるキリスト誕生の劇、ダンス、ゲームなど、参加者全員で楽しいひとときを過ごすことができました。



⑤アドボカシー（権利擁護）&コミュニティ意識向上プログラム リハビリテーションセンターのオープンハウス

STAC5 の 15 周年にともない、活動やセンターについてより深く知ってもらうために、オープンハウスを行いました。これまでの活動の写真を展示し、センターで行っているサービスの紹介、保護者が作った商品を陳列し、訪問者に見てもらえるようにしました。看護学校やご家族など 40 人の方が訪問してくださいました。



地域行事への参加

バギオ市やカバヤン町の自治体や地方社会福祉開発局が実施する全国しょうがい予防とリハビリテーション月間に、センターを利用する子どもたち、保護者やスタッフが参加しました。しょうがいに関する運動に、しょうがい児・者が参画していく重要な活動であり、国民に対してしょうがい者の権利や社会参加への気づきや意識を高めてもらうことにもつながりました。

⑥生活向上プログラム

手工芸品の披露会&技術共有

6 月 26 日、手工芸品づくりに参加している保護者が、他の保護者やスタッフに対して、自身が作った商品の紹介を行いました。古紙やプラスチックなどを再使用して作ったアクセサリ、バッグ、ポーチ、小銭入れ、伝統的な刺繍を施した布などを披露しました。

保護者たちは、手が空いた時に制作を行っているため、商品数は非常に少なく、市場調査や販売ルートの開拓が難しい状況ですが、親戚や友人などの協力を得ていくことも一つの改善策となります。

生計向上プログラム

保護者の収入向上を目的に、洗濯石けん、漂白剤や柔軟剤、にんじんケーキ、スナック菓子、リサイクル商品、マッサージの方法など、計 11 回の研修を行い、のべ 68 人の保護者が参加しました。今後それぞれが商品を作り、それらを販売して家計収入の向上を目指します。



健康セミナー

2 月 26 日、医師の協力を得て、健康セミナーを開催し、22 人の保護者が参加しました。病気や死につながるリスク要因、健康管理の方法などについてお話いただきました。

<今後の課題>

2012年度は、大人になって行く利用者の自立生活プログラムをスタートしました。2013年度も引き続き、第2期生を受け入れます。子どもたちが作ったものをリハビリテーションセンター内で販売したり、お金の管理能力やコミュニケーション力の向上を図り、プログラムの内容も適時ステップ・アップしていきます。この自立生活プログラムが、家庭でもいかされるように保護者の方々との協力や連携も大切にしていきます。

保護者会では、生計向上プログラムで得た技術や知識をいかした商品の物販を考えており、その収益を、家計の安定や保護者会の活動基金として利用できるようにしたいとの声もあがっています。

C4Cでは、日本のNPOや作業所などとの連携や相互交流をはかり、現地団体や子どもたち、保護者の物づくりが、成長や自立生活につながるような事業を考えています。

C. 海外プロジェクト助成事業

C4Cの活動趣旨に賛同し、子どもの健全な成長を願い、将来コミュニティづくりに貢献する大人となるような活動に対して助成事業を始めました。第一弾として、2011年11月1日から2012年10月31日まで、タイ国東北地方のサコナコン県の農民レック・クットウォンケーオさんの事業を支援しました。

①「地域を愛する子どものプロジェクト」タイ国サコナコン県クットパーク郡コーノイ村（2011年11月～2012年10月）



レックさんは東北タイ貧村出身の農民でありながら、複合・自然農業を推進し、自然を適正に利用し、地域内で自給する農民ネットワーク形成に尽力した農民のリーダーです。国内外からも多くの人々が彼の方法を学びに来、彼も多くの講演をこなしてきました。これからは地域の知識、哲学、文化などを若い世代に継承していくことが、近年急激なグローバル化によって崩壊しつつあるコミュニティ再生のための最重要課題であると考えた彼は、現在村に住み農業を営みながら、青少年グループの支援活動を継続して行っています。

本プロジェクトでは、彼が相談役として関わるコーノイ村の子ども会の活動を支援しました。

コーノイ村は、サコナコン県の森林が比較的豊かに残る山の中に位置しています。子ども会は、地元の小学生高学年から中学生までの約50人とOB・OGである高校生と大学生で構成され、年長者が率先して、年少の子どもたちを導きながら活動を行っています。本プロジェクトでは、以下のような活動を行いました。



(1) 月例会議一参加者が実践的な知識を学び、次の実践を計画する場で、これまでの活動を検討し新たな経験、知識、方法などを議論しました。実施日：2011年11月19日、2012年1月1日、4月6日、6月3日、7月2日、8月5日、9月8日、10月5日、合計8回。

(2) 地域の智慧や資源を調査し学ぶ活動一コミュニティの賢人から、樹木栽培、堆肥づくり、食物と薬草、家庭菜園、伝統文化の5つのテーマについての知識を学び、コミュニティの資源として記録しました。また賢人の引率で森に入り、食用に適した樹木や動物などの知識を実際に採集しながら学び、資源を保護し尊重する意識を高めました。実施日：2011年11月24日伝統的調味料プララー作り、参加者38名、12月3日薬草の加工、参加者38名、12月10日伝統的な子どもの遊び、参加者38名、12月17日薬草の加工（カプセル作り）、参加者37名、2012年1月14日薬草の加工（森での採集）参加者36名、1月21日人物モデル調査（竹籠作り）、参加者50名、2月18日自然資源と森を守る学習（森周縁を掃除して防火線とする）、3月3日地域で生きる方法（川で竹籠や網で小魚やエビをとる）、参加者38名、3月4日人物モデル調査（ござ織り）、参加者15名、4月21日堆肥を作る社会奉仕活動（牛糞から堆肥を作り、のちに村人に配布した）、参加者23



名、5月10日地域で生きる方法（川で魚とり）、参加者38名、7月14日人物モデル調査（竹籠作り）、参加者50名、8月18日人物モデル調査（機織り）、参加者38名。合計13回。

（3）その後、コミュニティの資源情報をまとめました。

<今後の課題>子どもたちは、コミュニティ資源である森や自然のものを利用する知識や技術、そして村の伝統文化を学び、その重要性を十分に認識するようになりました。そして日常生活に取り入れ、農業を基本として暮らす生活技術を身に着ける点に関して、一定の成果を得たと言えます。また子どもたちだけでなく、大人たちも本プロジェクトの活動に喜んで参加し、自らが持つ伝統的知識・技術（機織り、ござ織り、竹細工など自然資源の利用）を子どもたちに教えることで、自分たちの生き方に自信を持つことができました。1年間を振り返って、子どもたちの活動は、コミュニティに刺激を与え、その再生への道筋をつけることができましたと考えます。

しかしながら、コーノイ村周辺地域に高校がないため、高校以上の学業は遠くの町まで通うか下宿しなければなりません。そのため子ども会の運営の継続自体に問題があります。このプロジェクト運営の中心となっていた女の子は、大学に通うため都市で下宿を始め、村での活動に参加できず、村に住む高校生たちにはまだお金の管理についてのノウハウがありません。今後、コーノイ村の子ども会による「地域を愛する子どもプロジェクト」は、レックさんに託され、彼の指導のもと自分たちで活動を広げていくことになりました。

1-2. 国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む防災・福祉学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域全体の防災力・福祉力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す』

このことを実現するために、2012年度、宮城県内で取り組まれる児童・生徒・学生・青年層が主体的に参画する防災・福祉学習の実施に向けて調査・研究活動を2012年度より始めました。そして、10歳の子どもの成人する期間をイメージして、10年スパンの学習ビジョンを持ちながら、防災・福祉学習を実施・検討・計画している地元の社会福祉協議会、NPO、学校等と相談しながら、次のような活動をサポートしました。

①防災・福祉学習プランの企画、立案、実施への協力

県内で実施された防災・福祉学習プランおよび事業について、共催および協力団体として実施をサポートしました。

2012年8月8日大崎市社会福祉協議会「福祉教育推進セミナー」

会場：大崎市古川保健福祉プラザ

対象：大崎市内の学校教職員・社協職員・福祉教育に関心のある方

人数：40人

内容：福祉・ボランティア活動協力校による事例報告、
桑原代表理事による講演、ワールドカフェ

8月10日 美里町社会福祉協議会「私たちの防災教育研修会」

会場：美里町駅東地域交流センター

対象：美里町内公立学校の教員（幼稚園教員を含む）
（県内社協職員の聴講可）

人数：142人

内容：日本福祉大学原田正樹氏による基調講演、
WellbeDesign 篠原辰二氏・桑原代表理事による実践事例報告、
グループ検討

10月25日 柴田町社会福祉協議会「秋・ボランティア体験学習スペシャル」

会場：柴田町地域福祉センター



対象：柴田町内の中学生

人数：15人

内容：東日本大震災について、防災ゲーム「クロスロード」、炊き出し体験、私たちにできるボランティア活動を考える



12月8日 復興大学災害ボランティアステーション

「災害ボランティアスキルアップセミナー

『次世代を育てる 防災・福祉教育の可能性』

会場：東北学院大学土樋キャンパス

対象：震災復興支援ボランティア活動に取り組む学生

人数：100人

内容：桑原代表理事による講演、C4Cの宮城事業紹介



12月12日 美里町社会福祉協議会「美里町立小牛田小学校 防災教室」

会場：美里町立小牛田小学校

対象：小牛田小学校1・2年生、3・4年生

人数：200人

内容：防災〇×クイズ（1・2年生）、KYT（危険予知トレーニング）ゲーム（3・4年生）



②防災・福祉学習のためのプログラム・ツールの研究開発

NPO法人FOR YOU にこにこの家による仙台市パイロットプロジェクト事業「仙台版 自助・備えゲーム」（仮称）において、ゲームの研究開発に携わりました。下記に記した会議、研修会では、桑原代表理事と共に情報提供、改善提案などのアドバイスを行うと共に、報告会では、この取り組みの重要性や社会的な位置について報告しました。

会議名	出席日
仙台市内協力者会議	9/14 1/26
アドバイザー研修会	10/5 10/6 11/13 11/22
パイロットプロジェクト会議	10/20
学校教育用ゲーム開発会議	12/6 12/7 1/25 3/7
ファシリテート研修会	1/9
中間報告会	11/23
「仙台版体験型そなえゲーム」 発表会・体験会	3/20 5/28



③事業実施に必要な人、ツール、情報などの提供、コーディネート

今後、防災・福祉学習を推進していく上で重要な位置づけとなる下記ネットワーク会議に出席し、情報提供およびネットワーク形成・情報収集を行いました。

2012年10月4日、11月21日 宮城県内大学等ボランティア関係者による懇話会

主催：復興大学災害ボランティアステーション

内容：県内大学のボランティアセンター・ボランティア担当課、社会福祉協議会、中間支援NPO等による学生ボランティア活動推進のための情報・課題共有会議

2013年5月30日 子育て支援情報の共有・発信に向けたネットワーク会議

主催：NPO法人石巻復興支援ネットワーク

内容：石巻市やその周辺地域における、子育て期の母親支援に関する情報の共有や発信について検討

④ 防災・福祉学習カフェの開催

県内の事業実施主体へのヒアリング調査・研究の結果、東日本大震災以降、これまでの防災・福祉学習のあり方を見直そうという動きが宮城県内各地でみられ、住民一人ひとりの命と暮らしを守りながら、「災害にも強い福祉のまちづくり」を目指す防災・福祉学習、未来の地域を担う人材＝子どもたちを育てる防災・福祉学習を目指そうという機運が高まっていることがわかりました。

しかし一方で、学校の教員や社会福祉協議会の職員など、防災・福祉学習の実践者からは「何からどのように手をつけたら良いか」「先進的な取り組みから、実践の方法を学びたい」といった声も聞かれました。

そこでC4Cでは、宮城県内における防災・福祉学習の先進的な取り組みを学びながら、実践者がそれぞれの地域において「これからの防災・福祉学習」に取り組むための一歩を踏み出す機会を提供することを目的として、「防災・福祉学習カフェ」を企画しました。2012年度は、2回実施しました。

2013年1月10日 防災教育カフェ in 石巻

主催：NPO法人石巻復興支援ネットワーク

協力：コミュニティ・4・チルドレン

会場：石巻復興支援ネットワーク事務所

対象：石巻市役所職員、石巻市教育委員会、社会福祉協議会、NPO等

人数：10人

内容：石巻市における各組織の取り組みや課題の共有、
今後に向けた連携の模索



5月1日 防災・福祉学習カフェ in みさと

主催：コミュニティ・4・チルドレン

会場：美里町 駅東地域交流センター

対象：大崎管内の社会福祉協議会職員、学校教員、NPOスタッフ等

人数：47人

内容：仙台市宮城野区社会福祉協議会 黒田晋さんをゲストに、
黒田さんの開発された福祉教育ツール「災害疑似体験」の体験、
参加者間情報交換・交流



<今後の課題>

調査やセミナー・研修会実施を通じて明らかになったのは、東日本大震災の経験や教訓を今後につないでいくために、①今こそ、地域の多様な担い手が協力し合って、一人ひとりが尊重され、よりよく生きていくための防災教育・福祉教育の下地を作ること、②大人も子どもも一体となって『安心・安全に暮らせる支え合いの地域づくり』に取り組んでいくことが必要であるということです。しかし少子高齢化や震災の影響により、そうした取り組みの担い手不足も叫ばれている現状があります。

こうした宮城の課題を解決するためには、次の四つが急務であると考えます。

- ・子どもたちによる震災後の助け合い活動を平時の活動へとつなげていくこと（ボランティア・福祉学習）
- ・これからの復興を支える地元人材の育成へとつなげていくこと（復興学習、キャリア学習）
- ・震災を通して感じた命や災害への備えの大切さを再確認し次世代に伝えていくこと（防災学習）
- ・子どもも若者も「地域住民＝コミュニティの担い手」として地域活動に主体的に参画できる環境を作っていくこと

こうした状況を踏まえ、これからの防災・福祉学習に取り組んでいくにあたっては、経験を教訓につなぐための効果的なツールやプログラムを生み出す前に、まずはこれまでの防災・福祉教育を見つめ直し、地域性を踏まえた防災・福祉学習ビジョンを描き、実現に向けたプロセスを描くことのできる人材育成が必要不可欠です。

2013年度もC4Cでは本事業において、宮城県内在住の児童・生徒・学生・青年層を中心とした地域住民や、防災・福祉学習推進の担い手の方々による取り組みをサポートしていきます。特に2012年度の調査研究結果をもとに、地元の担い手の方々とともに協働事業の実施や防災・福祉学習に関する研究会の設立など、より具体的な事業の展開と今後に向けた人材育成、体制・ビジョンづくりを目指します。また、県内外の担い手の方々に向けた情報発信にも力を入れて取り組んでいきたいと考えています。

2. 視察・研修・ワークショップなど

2-1. スタディ・ツアー

A. フィリピン・スタディツアーの実施：「山岳部しょうがい児・者の暮らしとコミュニティ・ケアを学ぶ」JPCOM-CARESとの共同開催

2013年3月2日～3月9日(7泊8日)の日程で、山岳部のしょうがい児・者の暮らしとコミュニティ・ケアを学ぶスタディツアーを実施しました。フィリピン・ルソン島北部のバギオ市とカバヤン町において、厳しい生活環境に暮らすしょうがいのある子どもたちが、地域内で自立した生活ができるよう、リハビリテーション、学資・奨学金制度や保護者の経済的自立支援を行う現地団体JPCOM-CARESの取り組みを学びました。参加者はNPO職員1名、大学生4名、中学生1名の計6名でした。日程前半、カバヤン町では、合宿形式で自立生活プログラムに取り組む3人の利用者との交流や保護者との懇親、家庭訪問をしました。後半は、バギオのリハビリセンター利用者の家に2泊3日のホームステイをし、しょうがい児と家族のつながり、地域の方々との関係などを生活視点から学びました。



B. タイ・スタディツアーの実施：「東北タイ・ホームステイ、伝統音楽・踊り、瞑想の旅」カムクーンカムペン財団との共同開催

2013年3月18日から25日まで(7泊8日)、東北タイ農村の生活や文化を体験するツアーを行いました。ホームステイしながらカムクーンカムペン財団が支援している子どもたちと一緒に音楽や踊りを習い、また寺院では瞑想修行を体験しました。参加者は、3名、C4C同行スタッフ1名の計4名でした。

参加者は2か所に分かれて村でホームステイし、子どもたちが日常生活のお世話をしてくれました。言葉によるコミュニケーションには不自由でしたが、子どもたちは人懐こく、日本人参加者に接してくれ、直接現地の子どものたちと触れる機会を多く持つことができました。八戒(午後からの食事の禁止を含む)を守り、白衣を着て瞑想修行をしながら寺院で過ごした2日間、普段日本では体験することがない非日常生活を満喫できたでしょう。瞑想修行の後、村に戻り、最終日は子どもの保護者や村長さんらも集まった場で、子どもたちと参加者が一緒に音楽に合わせて踊りを披露しました。村人たちも日本人が踊る様子を暖かい目で見守ってくれました。タイ人・日本人の双方にとって有意義な1週間でした。



2-2. 国内 I Do Café (あい・どう・かふゑ) 事業

I Do Caféでは、子どもたちの明るい未来と育ちを願い、その想いを形にし、社会に貢献しようとしている実践者をゲストに招きお話をうかがっています。ゲストのお話や参加者同士のディスカッションを通じて「つながり」と「広がり」を生み出すことを目的に、2か月に一度大阪を中心に開催しています。ゲストや参加者一人ひとりの「I Do」が「We Do」へと広がりつながっていくことを目指しています。

<今年度の開催実績>

◆Vol.6【日時】2012年8月4日(土)14時～17時 【場所】ECC国際外語専門学校7階

【ゲスト】 仙台市東四郎丸児童館館長 小岩孝子さん

【テーマ】 東日本大震災を経験した子どもたちと共に

【人数】 18名（学生2名、社会人10名、ゲスト1名、C4C 5名）

【内容】 東日本大震災が発災した当時のこと、余震が続く中、子どもたちが「僕たちもやるよ」と声をあげ集まり、炊き出しやサロンの開催、避難所に来られない方々へ物資を届けるなど、子どもたちが主体となって取り組んだ活動についてお話をうかがいました。小岩さんは、「子どもたちは、“優しさとたくましさ”と未来”を大人たちに届けたと思う。今後、子どもたちがこの震災の経験を消化して、風化させることなく次の世代に伝えていく事もすごく大切」とおっしゃっておられました。Café後半のグループディスカッションでは、小岩さんが取り組んでいきたいと考えておられる「みんなで学べる防災学習のアイデア」についてアイデアを出し合いました。



【参加者の声】

- ・地域の中で、小さくてもアクションを起こしたい。まずはお隣さんや地域の子ども会などと共に何かを始めることからスタートしなければ！
- ・小岩先生の話聞いて、子ども達の強さと可能性を知りました。たとえ相手が小学生、中学生でも信じて任せる事は大切。

◆Vol.7【日時】 2013年1月25日（金）16時30分～18時10分 【場所】 神戸常盤大学本館4階食堂

【ゲスト】 なし

【テーマ】 アジアの子どもたちが笑顔で育つ地域づくり&スタディツアー説明会

【人数】 10名（学生4名、常盤ボランティアセンタースタッフ1名、社会人2名、C4Cスタッフ3名）

【内容】 C4Cの広報活動とスタディツアーの参加者募集を目的に、神戸常盤大学との共催で、C4Cが支援を行っているフィリピン山岳地帯のしょうがい児・者の暮らしと現地団体の取り組みをお話させていただきました。過去のスタディツアー参加者であり、ポストカードを売ってフィリピンに井戸を送るIDo Projectの実践者でもある高木さんに、スタディツアーで見聞きしたこと、感じたこと、IDo Projectが生まれたきっかけやプロセス、今後の展望などについてお話いただきました。スタディツアーに参加した後やそれぞれの場所からできることについて考えてもらえるような機会を目指しました。このCaféで出会った学生1名が、タイスタディツアーに参加しました。

【参加者の声】

- ・小さいときから、福祉をいろいろと見てきた。学んでいる学科も4月以降の進路も社会福祉で、フィリピンの取り組みを聞いてよかった。
- ・実習を通して、地域看護に関心が出てきて、地域の人たちの健康を見られるようになりたい。

◆Vol.8【日時】 2013年5月12日（日） 14時～17時 【場所】 市民活動スクエアCANVAS谷町

【ゲスト】 タイスタディツアー参加者 : 高橋彩さん、濱沙織さん

フィリピンスタディツアー参加者：板野裕子さん、上村康弘さん、岸田涉耶さん、
内藤清信さん

【テーマ】 スタディツアー報告記 ～子どもたちが笑顔で育つ地域づくりに出会う旅～

【人数】 27名

（タイスタディツアー2名、フィリピンスタディツアー5名、学生3名、社会人13名、C4Cスタッフ4名）

【内容】 タイスタディツアー、フィリピンスタディツアーの参加者より、スタディツアーの報告をしていただきました。フィリピンでは、山岳地帯だからこそのアクセス面での苦勞、しょうがいと貧困が密接

に関わっていること、制度がない中で現地団体が保護者たちと取り組むコミュニティ・ケアの大切さを感じたといった声が聞かれました。タイでは、現地スタッフと子どもとの関わりを通して、常に気にかけて愛情を伝えてくれる人の存在が子どもにとっていかに大事か感じたといった感想が聞かれました。

【参加者の声】

- ・自身も過去にスタディツアーに参加し、またこうやって話を聞かせていただいて、つながっていると感じました。毎年、現地の子どもたちや保護者の方々を同じ場所で写真撮影し、変化を見続けていく、そして次のメンバーへとバトンを渡していく、過去参加者にも共有していく、そんなことができたらいいのではないかな。
- ・自身がソーシャルワーカーを目指すきっかけになった現地団体のスタッフに会いに、またフィリピンへ行きたいと思いました。
- ・アジアの国の中で、どんな事がおこっているのか、若年層に知ってもらえるような取り組みをすすめたい。

【今後の課題】

これまで8回のCaféを開催してきましたが、新しい参加者とリピーター、学生と社会人など、毎回、再会と新しい出会いが生まれる場になっています。継続して参加してくださっている方の中には、I Doの具体的なイメージやアイデア、ひらめきの声が聞かれるようになってきました。I DoがWe Doへと広がっていくように、参加者の声に耳を傾け、C4Cがつなぎ手になっていくことができたらと考えています。

2012年度は3回の実施と不定期での開催となりました。2013年度は、C4Cとの連携や協働をイメージしながら、子どもの笑顔が広がる地域づくりを实践されている個人や団体との新たな出会いやすでにつながっている方々との関係を育てていき、Caféゲストとしての参加や企画から共催していただける仲間を広げていきたいと考えています。

2-3. 招聘・視察・研修事業

①フィリピンでのインターンシップ・プログラム

タイの連携団体であるカムクーンカムペン財団のスタッフ Samai Chalermwong に、2012年10月15日から2013年1月15日までの3か月間、フィリピン・JPCOM-CARESのインターンとして研修してもらいました。カムクーン財団とJPCOM-CARESはどちらもC4Cが支援する現地NGOです。日本からの一方的な支援ではなく、C4Cがアジアで活動をするためには、アジア諸国間でもお互いに人的支援や交流することが望まれます。今回は、アジア諸国間の研修・交流の一環として、若いタイ人スタッフをフィリピンに送り出しました。彼のインターンとしての目的は、まず他者と意志疎通ができるぐらいの英語能力を身に着けること、JPCOM-CARESの事業の立案、運営を学ぶこと、そしてタイに帰国してからその経験を自分の活動に生かすことでした。

サマイはフィリピン滞在期間中、JPCOM-CARESのスタッフとの関係も良好で、様々な活動に参加し、文化の違いを含めた様々な経験を得ることができました。

3. パートナーシップ推進事業

3-1. 調査事業

①宮城県における地域一体で取り組む防災・福祉学習推進事業のための調査

宮城県における本事業の展開を始めるにあたって、県内で実践されている防災・福祉学習事業の実施主体を訪問し、ヒアリング調査・研究、事業実施に関する意見交換等を行いました。

分野	組織	調査回数	主なヒアリング内容
社会福祉協議会	宮城県社会福祉協議会	随時	県域情報
	大崎市社会福祉協議会	10回	福祉教育推進セミナー
	美里町社会福祉協議会	6回	防災教育研修会
	栗原市社会福祉協議会	1回	防災福祉マップ作成

	柴田町社会福祉協議会	4回	小中学生ボランティア体験
	登米市社会福祉協議会	1回	地域一体型防災教育
	岩沼市社会福祉協議会	6回	指定校実践報告会
	山元町社会福祉協議会	3回	地域一体型防災・福祉学習
	女川町社会福祉協議会	3回	地域一体型防災・福祉学習
	名取市社会福祉協議会	2回	地域一体型防災・福祉学習
	仙台市宮城野区社会福祉協議会	1回	災害福祉体験ゲーム
NPO 地域団体	FOR YOU にこにこの家	2回	そなえゲーム開発
	石巻復興支援ネットワーク	10回	女性と子どもの防災
	ほっとスペース	4回	利用状況
	高校生カフェ「 」(かぎかつこ)	4回	実施状況
	仙台市市民活動サポートセンター	1回	復興人材育成
	子どもグリーンサポートステーション	1回	子どものグリーンケア
	みやぎ生活協同組合	1回	地域防災・防災教育
	宮城県沖地震対策研究協議会	1回	災害に強いコミュニティ
	コドモ・ワカモノまちing	1回	職業体験イベント
	キッズデザイン協議会	1回	子ども向けワークショップ
教育機関	宮城県教育庁(県教育委員会)	3回	防災主任配置、防災主任研修
	名取市立増田小学校	1回	地域参加の避難訓練
	仙台市立七郷小学校	2回	復興教育、こころのケア
	岩沼市立玉浦中学校	2回	福祉教育実践、総合防災訓練
	大河原町立大河原中学校	1回	被災地支援活動
	復興大学災害ボランティアステーション	2回	県内大学による復興人材育成
	東北大学災害科学国際研究所	1回	研究機関との連携
地域	栗原市栗駒耕英地区	1回	2008年岩手・宮城内陸地震
県外	ウェザーハート(山形県山形市)	3回	サバイバル防災体験
	輪島市児童センター	1回	被災地域間交流
	全国地名研究者大会「災害と地名」 (神奈川県川崎市)	1回	災害地名
	諏訪市立上諏訪中学校 (現地担当者が講演)(長野県諏訪市)	1回	水害後の地域づくり
	兵庫県立舞子高等学校	1回	こころのケアと防災教育
	全国社会福祉協議会「災害ボランティアセンター運営者研修」(東京都)	1回	平時の防災・福祉の取り組み

調査研究を一年間続け、東日本大震災により甚大な被害を受けた宮城県沿岸部だけでなく、内陸部においても、「震災直後は避難所や災害ボランティアセンターにて、子どもが力になってくれてとても助かった」「若いパワーに元気をもらった」という声が多数聞かれました。現在学校生活は通常通りに送られているものの、地域の子もたちへの期待は震災以前に増して大きくなり、「地域のためにこれからも何かをしたい」という子どもたちも多くなりました。

日本では震災以前から少子高齢化、過疎化、生活困窮者の増加など様々な変化が起こり、結果的に地域の絆が弱まり、セーフティネットの弱体化が進んできた現状がありました。宮城県におけるその現状は、震災を機により深刻化、加速化しています。震災からの復旧・復興への取り組みが続く中、『安心・安全に暮らせる支え合いの地域づくり』が、これからのコミュニティ形成が目指すものとして各地で掲げられ、住民や地域団体を中心にさまざまな担い手によって取り組まれています。また同時に、震災の経験と教訓から、災害時の自助・共助を見直す取り組みも各地で始まりました。

しかし少子高齢化や震災の影響により、災害時の自助・共助や、平時の命と暮らしを守る取り組みの「担い手不足」が叫ばれているのが現状です。震災の経験や教訓を今後につないでいくために、

(1) 今こそ、地域の多様な担い手が協力し合って、一人ひとりが尊重され、よりよく生きていくための防災教育・福祉教育の下地を作ること

(2) 大人も子どもも一体となって『安心・安全に暮らせる支え合いの地域づくり』に取り組んでいくことが大切であると、調査を通じて明らかになりました。

②フィリピンしょうがい児・者のための自立生活支援センター設立のための調査

JICA 関西の平成 24 年度市民参加協力事業の支援を受け、「フィリピン・ルソン島山岳部におけるしょうがい児・者のための自立生活支援センター建設のための事前調査活動」を行いました。

2012 年 10 月 20 日～25 日（6 日間）、調査実施者：栗原英文（C4C 代表理事）、河内崇典氏（NPO 法人み・らいず代表）、辰巳健氏（み・らいずスタッフ・介護福祉士）。

これまで C4C が支援する現地団体 JPCoM-CARES は、リハビリテーション・センターを開所し、しょうがい児が自立するのに必要な理学・作業療法、教育支援などを行ってきました。しかし、しょうがい児も大人へと成長します。大人となった時、親が亡くなった後、どのように自立生活を営むのかが、これからの課題です。しょうがい児が将来、大人になって自立生活を営むためには、家族の理解の元、自分たちのしょうがい理解する仲間たちと自立生活を訓練する必要があると考え、C4C と JPCoM-CARES の間で自立生活支援プログラムの充実とセンター設立を検討中です。その実現可能性を知るために、日本でしょうがい児・者の自立生活支援を行う団体の代表と専門家を招き、現地バギオとカバヤンで調査活動を行いました。

③タイ・フィリピン調査 2012 年 6 月 23 日—7 月 8 日、調査実施者：栗原英文代表理事、加藤眞理子理事、菅原清香（C4C 宮城防災福祉教育コーディネーター）

連携団体であるフィリピン・JPCoM-CARES とタイ・カムクーンカムペン財団を訪問し、年次報告決算と次年度予算案について話し合ったのち、子どもやしょうがい児に関する施設を訪問し、制度や地域との協働の機会を模索するために情報収集しました。

フィリピンでの訪問先：JPCoM-CARES リハビリテーションセンター、奨学生の学校（3 校）

タイでの訪問先：ノンメック村住民と牛銀行についての話し合い、コンケン特殊教育センター、サワティー行政自治体、コンケン市青少年センター、バンコク・ナンラン・コミュニティ図書室、チョンブリ県シラチャー郡自閉症児センター、プラチンブリ県アパイブベート病院

④カンボジア・Khmer Community Development (KCD) 2012 年 8 月 15—22 日、調査実施者：栗原英文代表理事、加藤眞理子理事

現在のカンボジアにおける大きな問題は、平和と教育です。長年に渡る内戦の傷跡は、社会の様々な面でまだまだ残っています。安定した国家を建設する過程で、すでにグローバル化の波に飲み込まれてしまったカンボジアでは、小学校にさえ行くことができず、クメール語の読み書きが十分にできないまま、仕事をしなければならない者が多くいます。前回カンボジア調査の際、オフィスを訪問する機会を持った KCD の組織の運営と具体的な活動を、フィールドである Prek Chrey の村へ行って調査しました。

KCD は、2002 年にカンボジア人大学生が作ったボランティアサークルから始まり、現在はローカル NGO として、ドイツなどの複数の海外援助機関からの支援を受けています。活動地域は、プノンペン南部のカンダール州 Prek Chrey で、ベトナム国境まで約 10 キロのパサク川下流に位置し、度々、洪水に覆われる地域で、ベトナム人とカンボジア人が混在したコミュニティです。氾濫原に位置しているため、村人たちは毎年水位の増減によって農業を行っていますが、土地が限定されているため他の仕事がなかなかできません。ほとんどの世帯にはトイレがなく、電気も通じていません。また小学校の就学率も 5—6 割で、子どもたちは小さい頃から親の仕事を手伝っています。KCD は、子どもとコミュニティのために、次のような活動をしています。（1）農村開発—Saving Group、牛銀行、米銀行、有機農業促進、（2）子ども支

援一教育支援、学校の教育を補うために子どもが年少の子どもに教えるボランティア、コンピュータ教室、図書室、スポーツ推進。今後、協働するためにも、さらに調査や話し合いを進める所存です。

⑤ラオス・PhuDinDaeng 青少年センター訪問 2012年12月4-7日、調査実施者：加藤真理子理事

センターは、ラオスの首都ヴィエンチャンから北へバスで3-4時間のところにあるリゾート地バンビエンにあります。元 UNESCO 職員の韓国人リーさんが、何度か、韓国からのボランティア・ワークキャンプを組織しオフィスや教室などの建物を建設しました。子どもたちに英語を身に付けさせ、就活へとつなごうと英語教育に重点をおいていました。以前、村の大人に対する支援もしていたが成果がでなかったため、子どもの教育に今後特化していくとのことでした。しかしラオス人スタッフとリーさんとの意識のギャップがあり、ラオスのローカル NGO としては、まだ不安定なようでした。

⑥タイ・カンボジア調査 2013年3月25日-4月18日、調査実施者：加藤真理子理事

◆タイ・メコンネットワーク(タイ国・東北地方7県メコン川流域コミュニティ組織議会ネットワーク)

メコンネットワーク主催「メコン川を保護する青少年ネットワークの潜在能力開発キャンプ(3月25-27日)」に参加し、タイの青少年の状況や彼らがどのような活動をしているのかを調査し、その後いくつかの村に行き、青少年活動を実際に観察しました。

メコンネットワークというのは、メコン川に関係する共通の問題(ダム建設、洪水など)を解決するためにそれぞれの地域で活動する住民組織が参加する緩やかなネットワーク組織です。メコン川流域の100近くの地域で活動する大小さまざまな住民グループがあり、主に環境問題に関わることが多いですが、中に青少年育成を目的としたグループも多々あります。いくつかメコン川沿いの村を回り、いくつかの青少年の活動を見た結果、以下のようなことがわかりました。地域の住民リーダーたちは子どもや青少年の扱いに困り、育成事業をやりたいと考えていること、しかしその方法は試行錯誤の段階であること、国境沿いという地域の状況から青少年のドラック常用などの問題が深刻であることなどです。そして青少年を主体として、いくつかの地域ではスポーツ(サッカー)、魚種保護、伝統的踊りなどの活動が始まっていました。広域ネットワークであるため、すべての青少年活動を観察できたわけではありませんが、やはりタイ国内でも環境保護活動を継承する若者不足が深刻になっており、青少年育成は早急に進めなければならない案件であることを確信しました。今後も、メコンネットワークとは情報交換しながら、交流の機会を探す予定です。

◆カンボジア・KCD、SVA(シャンティ国際ボランティア会)カンボジア事務所訪問

KCDのスタッフとは現在の予算状況について聞きました。今後C4Cとどのような協働体制がとれるか、深い話をしたかったのですが、スタッフの異動、いくつかのドナーへの申請書書きなどの理由で、現時点では具体的な予定計画まで話し合うことはできませんでした。

SVAでは、カンボジアのNGOや社会問題について全体的な質問をし、現場の状況把握に努めました。

4. 情報提供事業

4-1. ホームページ、ブログ、facebookによる情報発信

これまでブログにて情報発信をおこなってきましたが、2012年11月にホームページ

(<http://www.community4children.com>)を開設しました。2012年11月~2013年5月末の間、885人の方に訪問いただき、4268のプレビューをいただきました。「タイ」や「フィリピン」といった検索キーワードに加えて、「防災教育」や「福祉教育」といったキーワードでの検索も増えてきています。今後もホームページとともに、2つのブログとFacebookとのリンクを工夫しながら、C4Cをご支援・応援くださる方々に情報をお届けできるように、また、多様な方々にC4Cの活動を知っていただけるように発信を行ってまいります。

★<http://ameblo.jp/community4children/>

★<http://blog.canpan.info/c4cc4c/>

4-2. イベント参加

ワン・ワールド・フェスティバル 2013年2月2日(土)ー3日(日)10時~17時 於 大阪国際交流センター

「共に生きる世界をつくるために一人ひとりができること」というテーマのもと開催された、国際協力のお祭り「ワン・ワールド・フェスティバル」に参加しました。2日間の来場者数は16,500人にのぼり、政府機関や教育機関、NGO、企業等180団体が参加しました。昨年に引き続き、C4Cは活動紹介ブースの出展という形でイベントに参加しました。昨年お会いした来場者や団体の方々の再会の機会となり、この場で出会った方が I Do Caféに参加くださいました。また、後日、同じく団体紹介ブースを出展していた団体の事務所を訪問し、情報交換することにもつながる機会となりました。

4-3. 東北タイ農村の牛銀行母牛サポーター募集キャンペーン

2012年12月より、東北タイ農村の青少年の就労支援基金を設立するために「母牛サポーター募集キャンペーン」を行い、牛を飼うためのご寄附を募りました。タイ国コンケン県ムアン郡サワティー行政区ノンメック村住民、カムクーンカムペン財団スタッフとC4Cが話し合い、しばしば干ばつに悩まされる東北タイの土地での飼育に適した家畜である雌牛を村人に貸出し、生まれた子牛のうち一頭を還元してもらい、村の青少年のための就労支援基金とする計画をたてました。このように地域内で牛を循環させることによって、青少年のための就労支援がコミュニティの将来にとって重要であることを多くの人に認識してもらい、継続的に子どもたちを支援する仕組みを作ることを目的としていました。

その結果、2013年5月末までに、合計177,400円のご寄附を賜りました。しかし当初の目標額である50万円に到達しなかったこと、急激な円安、現地の牛価格の高騰などの影響を大きく受けたことなどの理由で、当初の計画から、低利子融資制度に変更することになりました。

つまり合計177,400円の寄附をタイ・パーツに変換した51,000パーツを元に、2世帯に各25,000パーツを貸出し、雌牛(約1歳8か月)を買ってもらい、3年後利子3000パーツを上乗せした28,000パーツを返済してもらいます。そして50,000パーツは次の飼育者に貸出し、利子分6000パーツを就労支援基金として就労支援に役立てます。

今後は、為替変動、牛価格高騰のリスクを考慮して、牛銀行母牛サポーター募集を終了し、当面は低利融資を利用する雌子牛を飼育する世帯をサポートしつつ、コミュニティにおける子どもや青少年の重要性を訴え、理解者や賛同者を増やすことに重点を置きます。

5. 組織運営

2012年度会員について

2013年5月31日現在

会員数比較

	2011年度	2012年度
正会員(個人)	11	13
正会員(団体)	1	2
賛助会員(個人)	1	16
賛助会員(団体)	1	1
使途指定寄付(タイ牛銀行)		14
使途指定寄付(フィリピン)		1
一般寄付	5	2

正会員数は、2011年度とそれほど変わりませんが、賛助会員数はかなり増加しました。しかし2011年度正会員であったが、2012年度に継続して会員にならなかった者が5名1団体ありました。お知らせなど、今後のフォローが必要だと考えます。



地域は子どものために、子どもは地域のために

<http://www.community4children.com/>